

伊佐家住宅

この広々とした施設は、何代にもわたって庄屋（村の長）を務めた伊佐家の先祖代々の住宅です。主屋は、江戸時代（1603 年－1867 年）中期のこの地域特有の住宅建築の、美しく修復され、よく保存された例となっています。1975 年に主屋が重要文化財に指定され、1980 年に、5 つの蔵、木小屋、普請文書、古図、宅地が追加指定されました。

伊佐家の住宅は、18～19 世紀にかけて徳川幕府天領地の管理を任されていた裕福な庄屋という地位にふさわしい造りとなっています。1734 年に再建された主屋は、特別に厚い茅葺きの屋根や、通常は公家や武士の家にしかなかった赤い土壁、特に大きなかまどである「大くど」を備えた広い台所、そしてたくさんの部屋が特徴となっています。伊佐家が日常的に使っていた道具の多くも良い状態で保存され、今なお家中で見られます。主屋の多くの部分は、村人と会ったり、幕府の役人などの大事な客をもてなしたり、祭礼用の食事を用意したりという、庄屋の務めを果たすためにとても重要なものでした。

主屋の南側には、かつては賓客を迎えるために使われていた、正面玄関に続く木製の式台が備えられています。このような式台は身分が高い人の家にしか許されておらず、家の格式が一目で分かる物でした。賓客はこの式台を上って広々とした玄関の間へ入り、間もなく大きな仏壇のある控えの間に入り、その後、主屋の西側の端にある奥座敷に通されます。奥座敷は、彫刻が施された木製の欄間や美術品を展示するための床の間と違い棚、金箔と絵画で覆われた引き戸のある小さな飾り棚で飾られています。玄関の間と控えの間、そして奥座敷は全て、江戸時代の姿を保っており、この家の重要な部分です。

敷地内にはその他にも注目すべき建造物や特徴があります。村の年貢米を保存するための二つの大きな蔵や、神社やお寺で多く見られる様式で作られ、高い所にある、家と二つの蔵をつなぐ屋根付きの渡り廊下などがあります。石垣で囲まれた敷地の南側には、かつて屋敷を囲んでいた堀の跡があり、また北側には竹林があります。施設全体は 2,600 平方メートルにもおよびます。

伊佐家住宅は一般公開されていませんが、予約制で訪問できます。